

外国人の日本語研究

——関係図書の歴史的展望と、日本語の
ローマ字綴り・抑揚表現について——

矢 吹 勝 二

は し が き

私は外国人に日本語を教えた経験を2回もっている。第1回目は早大学生時代。最終学年にアメリカ人宣教師 Mr. and Mrs. Robert A. Fleming の家に下宿し、最少限度に必要な日常日本語会話を教えた。第2回目は卒業後 JTB (日本交通公社) に就職してから数年たったとき、ビルマからきた留学生 Mr. Percy Lewis に、約1年間やや本格的に日本語を教えた。

この前後2回を通じて痛感したのは、外国語の初歩的研究段階では、自国語と他国語との比較言語学的立場をとるのが効果的であるということであった。(日本語と英語は異族語だから、この方法だけでは無理だし、それを長く続けることも無意味であることは論をまたない。)

またこの2回が動機になって、外国人が日本語を研究するための辞典や学習書に興味をもつようになり、かなり広範囲にわたって調査し、自分でも主なものを購入して内容を検討した。拙著 *JAPAN BIBLIOGRAPHIC ANNUAL 1956*⁽¹⁾ に収録されている関係図書だけでも約50種ある。

さらにまたこの検討と並行して、佐久間鼎、金田一京助、金田一春彦の諸教授その他の日本語学者の著書にも眼を通した。

さて、日本の国際的地位の向上に伴ない、諸外国における日本語研究熱は次第に高まり、日本語を教えている大学もかなり増加したようである。

私は英語を学び研究し教える立場から、日本語研究に役立つ英文の学習者を公にしたいと思って、かねてから上述のような研究をしていたが、このほど漸く脱稿したので、その一部をも含めて本稿をまとめた。

1. 外国人の日本語研究の歴史的展望

一般の外国人が日本語の研究に着手したのは、スペインの宣教師 Francis de Xavier (Yasu y Javier, 1506-1552) が、1549年に鹿児島に上陸、10ヶ月間滞在して帰国してから後のことである。「布教に伴ふ事業としてバテレン等は日本語を研究し、日本の吉利支丹徒は学林で西洋の学問を習った。」⁽²⁾

ザビエル来日の64年後、すなわち1613年にイギリスの東印度会社貿易船隊司令官 John Saris (1579頃-1643) が、日本との貿易を開始する目的で平戸にきた。彼は翌年帰国し、日本渡航記⁽³⁾を自らペン書きにして Francis Bacon (1561-1626) に献じた。これを見ると、つぎのようなローマ字綴りがあるのに気づく。

Tushma(津島); Ogosho sama (大御所様), the old Emperor; Fidaia sama, the young prince; the former Emperor Taico sama (大閣様).

Sarisの来日後249年目(1862年)には、Samuel Robbins Brown (1810-80)⁽⁴⁾の *COLLOQUIAL JAPANESE, OR CONVERSATIONAL SENTENCES AND DIALOGUES IN ENGLISH AND JAPANESE* が、Shanghaiの Presbyterian Mission Press から出版され (243 pp.), それから5年後の1867年には、James Curtis Hepburn (1815-1911)⁽⁵⁾の *A JAPANESE AND ENGLISH DICTIONARY, WITH AN ENGLISH AND JAPANESE INDEX* が、Maruya (丸善の前身) から出版されている。

この辞典には和英・英和対訳の約2万語が収録され、いわゆるヘボン式

綴りで日本語の発音を示し、漢字と片仮名がつけてある。1887年には補増改訂の第2版が出版された(1033 pp.)。

その後内外で公にされた日本語研究の辞典や研究書は内容が次第に充実し、その中でも特に古くて勝れているのは次の通りである。

(1) *A HANDBOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE*, by Basil Hall Chamberlain (1850-1935, イギリスの日本学者, 1873年に来日, 東京大学などで教鞭をとり, 1911年に離日)。初版1888年, 第4版1907年(横浜の Kelly & Walsh から出版, 584 pp.)

(2) *AN UNABRIDGED JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY, WITH COPIOUS ILLUSTRATIONS*, by Capt. F. Brinkley, R. A.; F. Nanjo; Y. Iwasaki. (Francis Brinkley, 1841-1912, イギリスの軍人として1867年に来日, 日本婦人と結婚, のちに *THE JAPAN MAIL* の経営兼主筆, 日本で逝去)。三省堂発行, 初版1896年, 改訂第7版1901年, 1687 pp.

(3) (a) *GRAMMAR OF THE JAPANESE SPOKEN LANGUAGE*, (b) *GRAMMAR OF THE JAPANESE WRITTEN LANGUAGE*, both by William George Aston (1841-1911, イギリス公使館の日本語通訳生として1864年に来日, 1889年に帰国)。(a)は博文社から1888年に第4版, 212 pp., (b)はロンドンの Luzac から1904年に第3版, 198 pp.

比較的にならしくて特筆すべきものは次の通り。

(1) *A. B. C. JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY*, 2 volumes, by Oreste Vaccari and Enko Elisa Vaccari. (Oreste は1886年にイタリアに生まれ, 1925年来日, 日本婦人 Enko さんと結婚, いま東京在住, Vaccari's Language Institute 社長)。この漢和英大辞典の Part I は, 初版1949年, 1343 pp., Part II も同年発行, 1746 pp., いずれも自社出版。

(2) *THE MODERN READER'S JAPANESE-ENGLISH CHARACTER DICTIONARY*, (最新漢和辞典), by Andrew Nathaniel Nelson. Charles E. Tuttle Co., Tokyo から1962年に初版, 1966年に改訂第2版, 1109 pp.

(3) *BEGINNING JAPANESE*, 2 volumes, by Eleanor Hary Jorden, with the assistance of Hamako Ito Chaplin. Yale University Press から Part I の初版を1962年に, 409 pp., Part II の初版を1963年に, 410 pp.

(4) *TEACH YOURSELF JAPANESE*, by C. J. Dunn and S. Yanada. 1958年に初版をロンドンの English Universities Press から出版, 310 pp.

(5) *FIRST LESSONS IN JAPANESE*, by N. Naganuma, 開拓社より初版を1952年に出版, 215 pp.

(6) *NEW INTENSIVE JAPANESE*, by Kenji Ogawa (Assistant Professor, Department of Asian Studies, University of British Columbia, Canada). 北星堂書店より初版を1966年に, 293 pp.

(7) *PRACTICAL SPOKEN JAPANESE*, by Junji Miura. 三省堂より初版を1964年に, 194 pp.

2. 日本語のローマ字綴りについて

上にあげた新・旧日本語研究書のうち, 新の(3)と(4)以外はヘボン式の綴りで, この2種だけが昭和29年12月9日づけの内閣告示第1号の第1表の綴りを使っている。しかしこの告示の「そえがき」に, 「長音は母音字の上に^をつけて表わす。なお大文字の場合は母音字を並べてもよい。」とあるが, (3)と(4)はいずれも大文字と小文字に関係なく, ^の符号を使わずに母音字を並べることにしている。

日本語の音をローマ字で表わすことは根本的に無理なので, ヘボン式では, *fu, sha, shi, shu, sho*, 内閣告示式では *ti, tu, tya, tyu, tyo* という日本語にない音が含まれることになる。しかし日本語を研究する外国人にとっては, 内閣告示式の方が動詞の語尾変化を表わすときに便利である。なぜなら次の比較表が示す通り, 内閣告示式では語幹 (stem) に *a, i, u, e, o* をつけねばすむが, ヘボン式では不必要に綴りが変化して別語の印象を与える。

(例) 「立つ」4段活用。

(内閣告示式) *tata (nai), tati (masu), tatu (toki), tate (nai), tatō (tatoō) (to omoimasu)*.

(ヘボン式) *tata (nai), tachi (masu), tatsu (toki), tate (nai), tatō (to omoimasu)*.

厳密な音声学的立場では, すべての日本語の母音や子音が英語のそれらと全然同じだとは言えない。舌の位置や口を開く度合が違ふし, 息の出し

方も異なる。殊に子音は日本語では英語ほど強く発音しないから、less aspiration である。しかし顕著な相違点を指摘して他は大同小異だと次のように説明すれば、日本語を研究する外国人初心者は次第に微妙な相違点を体得してゆく。

a は name や last の *a* ではなく、idea の *a*.

i は rice の *i* ではなく、sandwich の *i*.

u は undershirt の *u* ではなく、pudding の *u*.

e は cheese の *e* ではなく、menu の *e*.

o は notebook の *o* ではなく、melon の *o*.

長母音は内閣告示式の「そえがき」にあるような符号 (^) をつけないで、同じ母音字を二つ並べた方が、音の pitch の高低を示すのに便利である。このことについては、「3. 日本語の抑揚表現について」で述べる。

g は語頭では、orange の *g* ではなく egg の *g*. 語中語尾では nasal の [ŋ] が標準とされているが、若い層の間では [g] と発音する傾向が盛んになりつつあり、また擬声・擬態語そのほか nasal にならない場合が多い。⁽⁶⁾ しかし片仮名のガ行の濁点のかわりに小さなマルをつけたり、前にリストした Jorden の *BEGINNING JAPANESE* では *g* の上に横線を引いたりして、nasal であることを表現する場合もある。

n は、(1)子音の前または語尾では lunch の *n* のように⁽⁷⁾、(2)母音または半母音 (*y*) の前では、(1)のように発音しないで、menu の *n* のようにだが、(1)のように発音するときには、*n* の次に symbol (') をつける、(3) *n* が二つ並ぶときには例外的に、前の *n* が無声化しない。

ti (ヘボン式では *chi*) は、chicken の *chi* のように。

tu (/ *tsu*) は、hats の *ts* のように。

tya (/ *cha*) は、champion の *cha* のように。

tyu (/ *chu*) は、chewing gum の *chew* のように、しか

しそれより短かく発音し，唇をまるめない。

tyo (へボン式では *cho*) は，*choice* の *cho* のように。

促音便 (つまる音) は，子音字を二つ並べて表わす (内閣告示式には，へボン式の *tch* がない)。前の方の子音は，その前の母音に同化して無声化するが，その部分も日本語では *one syllable* としてかぞえ，他の *voiced syllable* と殆んど同じ長さの時間を必要とする。(日本語では，*a* などの母音，子音+母音，例外的な *n* が，それぞれ *one syllable* を構成し，それらを発音するに要する時間はほぼ同じである。)

この促音便は，かなりうまく日本語を話す外国人にも苦手である。英語では子音字が二つ並んだときに，日本語式にそこで *one syllable* に相当する時間を与えないからである。

つぎに母音の無声化の問題がある。これはゆっくり発音すれば問題にならないし，無声化の多い地方は関東地方 (東京は混合地帯) とそこに近い東北地方，それに九州だけで⁽⁸⁾，仮名書きの場合にそれを細字で表わしたり，ローマ字綴りでは無声化される母音字を省略することもあるが，外国人の日本語研究の初歩的段階では，丁寧に発音して無声化を意識しない方がよいようだ。

Jorden の *BEGINNING JAPANESE* には，これに関して次の説明が入れてある。

Whispered Syllables

The Tokyo dialect of Japanese is characterized by the frequent occurrence of whispered (that is, voiceless) syllables. Whenever an *i* or *u* vowel occurs between any two voiceless consonants (*k*, *s*, *t*, *p*, or *h*), the vowel automatically becomes voiceless or, in some cases, is lost.

3. 日本語の発音の抑揚表現について

日本語のは上下2段の「高低アクセント」(pitch accent), 英語のは複雑な「強弱アクセント」(stress accent) であるから, 高低・強弱の表現方法も当然変わらざるを得ない。(Jordan の *BEGINNING JAPANESE* では2段以上に)

日本語の場合には, 片仮名書きやローマ字綴りにして, high pitch の上に横線を引いたり, その部分にカギ型の符号をつけたりする。横線は語中で low pitch に変わるとき, その右端を下に折り曲げる。もし語尾で曲がっていれば, 次に来る語はそれ本来の高いまたは低い pitch を保持できるが, 曲がっていなければ, 次の語の first syllable は本来 low pitch であっても, 前の語の影響をうけて high pitch に変わり, 後の syllable にも高低の変化が起きる場合が多くなる。(私は high pitch の syllable は capitalize することにしている。)

(例) 「端」, ハシ (ガ), haSI (GA).

「橋」, ハシ (ガ), haSI (ga).

「箸」, ハシ (ガ), HAsi (ga).

しかし日本語は厄介なことに, つぎの例のように, 同一の語でも3種類に発音することがある。

(例) 「花卉」 ハナビラ (ガ), haNABIra (ga).

ハナビラ (ガ), haNABIRA (ga).

ハナビラ (ガ), haNABIRA (GA).

ローマ字綴りにカギ型の符号をつければ, 次のようになる。(研究社の和英辞典や Jordan の *BEGINNING JAPANESE*).

ha^ˉnabi^ˉra, ha^ˉnabi^ˉra, ha^ˉnabira.

日本語の pitch accent は, 次の点で英語の stress accent と異なって

いる。

(1) one syllable の語の中にも high pitch で発音されるものがあり、同じ綴りの low pitch で発音される語との違いが聞き分けられるようになっている。(ただし漢字には同音異義語が多いので、context によって意味を理解する場合が多い。)

(例) 「絵」, エ, E.

「東京へ行く」, エ, e.

「可, 科, 課など」, カ, KA.

「蚊」, カ, ka.

(2) 日本語の大多数の first syllable は low pitch で、second syllable は必ず high pitch。third syllable 以後は、最後まで high pitch の状態を続けるものもあり、途中で low pitch に変わるものもある。また first syllable が high pitch の場合には、second syllable は必ず low pitch に変わり最後までその状態を続ける。

(3) 日本語の high-pitched syllable は、同一語の中で二箇所に見られることはなく、必ず一箇所に集合しており、しかも英語の stress accent と異なり、voiced vowel の一箇所だけではなく、いくつもの syllables にわたって伸びている場合が多い。

(例) 「航空」, コークー, koOKUU

「郵便」, ユービン, yuUBIN

「航空郵便」, コークーユービン, koOKUU-YUubin

「航空便」, コークービン, koOKUUBIN

上の例の o や u の長母音字に、内閣告示の「そえがき」にあるような (^) や、Webster 辞典にあるような (-) をつけたのでは、pitch の高低が分からないことになる。しかし Jordan 方式で high-pitched syllable をカギ型の符号で示せば、その高低の区別はできるが、タイプライターで打つときに不便だし、見た目にも体裁がよくない。それを私の方式で

capitalize すれば、これらの欠点が万事解消してしまう。

それのみならず、促音便をローマ綴りにする場合に、カギ型の符号のつけ方に間違いがあることを発見した。例をあげて説明しよう。

発達	(1) ハ ^ッ タツ	割拠	(1) カ ^ッ キョ
	(2) ha ^{tt} atsu		(2) ka ^k kyo
	(3) ha ^{tt} atu		(3) ka ^k kyo
	(4) hatTATU		(4) KAKkyo

- (1) 日本放送協会編・日本語発音アクセント辞典、金田一春彦教授監修・明解日本語アクセント辞典。
- (2) 研究社和英辞典。
- (3) Jorden 著 *BEGINNING JAPANESE*.
- (4) 私の方式。

カギ型の符号のつけ方が間違っていると私が言うのは、音声学的な理由によるものである。日本語の pitch の移動は、syllable から syllable に移る境目に起こる現象であり、「次に来る子音が発音されようとするその状態のまま、1拍分息をこらえる音である。したがって口構えは次の拍の子音によって異なる。」⁽⁹⁾

だから hatTATU の場合には、hat の t のところで、次の TATU の最初の T を発音する口の形がはじまり、voiceless のままで pitch を上げ、それが voice になるのは TA のところである。また KAKkyo の場合には、KAK の最後の K ところで次の K を発音する口の形がはじまり、voiceless のままで pitch を下げ、それが voice になるのは kyo のところである。

しかるに、研究社や Jorden の方式で t や k の前にカギ型をつけると、ha や ka を発音した後に pitch を低→高、または高→低に変え、tt や kk のところで t や k を発音する口の構えをして、そこで息をこらえて1拍 (one syllable) 分の時間を与えるという不自然な結果になる。こういう発音のしかたは、よほどゆっくりしないとできない。しかし実際に日本語を

話すときには、そんなにゆっくりすることはないし、二つ並んだ子音字を見ると、英米人は **sitting, pudding** などを発音するときのように、**hatatu, kakyō** と短かく読んでしまう。

しかし **hatTATU, KAKkyō** と綴っておけば、**hat** や **cocktail** などの発音に慣れているから、無意識にまず **hat, KAK** と読み、つぎに **pitch** を上げたり下げたりして、**TATU, kyō** と読んでくれる。これは私が数人の英米人にテストしてみて、はっきり分かったことである。

だからカギ型の符号を使うのなら、それを二つの子音字の間に入れなくてはならない。そうしない習慣があるのは、片仮名書きの上の横線を見て、ローマ字綴りにしたときにも、そのままの位置にカギをつけるからである。

以上述べたことは、**word accent** ないし **compound-word accent** の場合であるが、日本語にも英語に似た **sentence accent** ないし **group accent** と呼ばれるものがある。また特に強調したい語を強く発音するという **prominence** の現象もある。

しかし日本語の高低アクセントは、「ことばのまとまりを示し、ことばの切れ目を表わす働きをももつと言えよう。アクセントは、同音語の区別に役立つと同時に、ことばのまとまりを示し、ことばの切れ目を表わすのだ。」⁽¹⁰⁾

その例として金田一春彦教授は、つぎの例をあげておられる。⁽¹¹⁾ (ローマ字綴りは私が付加した。)

ニワニワニワトリガイル (庭には鶏がいる) niWA NIwa niWATORI
GA iRU.

ニワニワニワトリガイル (庭には2羽鳥がいる) niWA NIwa NIwa
toRI GA iRU.

ニワニワニワトリガイル (2羽庭には鳥がいる) NIwa niWA NIwa
toRI GA iRU.

む す び

日本語を研究する外国人が、まず最初に当面する日本語のローマ字綴り・抑揚表現について、内閣告示式と capitalized, high-pitched syllable が有利であることと、促音便に原因して二つ並ぶ子音字に pitch の高低の差があるときには、もしそれをカギ型符号で示すなら、その間に符号をつけた方が English-speaking people には日本語らしい発音がしやすく、また音声学的にも正しいということを強調したつもりである。

仮名や漢字をおぼえる前に Romanized Japanese によって日本語を研究する外国人にとっては、pitch の高低を示す何等かの方法が必要であるのに、Jordan の *Beginning Japanese* 以外の学習書では、それを無視しているのは残念である。

近ごろでは tape-recorder や record が普及してきたので、(日本人が英語会話を勉強するときのように)、耳から日本語を入れて口に出すようにすれば効果的であるが、それだからといって学習書には pitch の高低を示す必要がないというわけにもいかない。

日本人のための英語学習書や辞典の数は極めて多く、その内容も充実しているが、それにくらべると、外国人のための日本研究書や辞典は、数においても質においても、はるかに劣っているように思えるので、日本の英語学者・研究者がこの点にも注目して、より多くの諸外国人が、もっと容易に正確に日本語の知識が得られるよう努力することは、日本のため、日本と諸外国との文化交流のため、ひいては世界平和のために必要だと痛感する次第である。

注

- (1) 北星堂書店発行、内外で出版された日本に関するあらゆる内容の英文図書の日録。第1巻は 318pp., 第2巻は1957年発行, 177 pp., この2冊に合計約4,000点を収録。

- (2) 故勝俣銓吉郎教授著「日本英学小史」, 研究社発行, 昭和11年, 51 pp.
- (3) *THE FIRST VOYAGE OF THE ENGLISH TO THE LANDS OF JAPAN, 1617*. この原本が東洋文庫に保存されており, 昭和15年に複製限定版300部が出版され, その中の1部が私の書架にある。この原本を編集して Sir Ernest Mason Satow (1843-1929, イギリスの日本学者) が1900年にロンドンの Hakluyt Society から, *THE VOYAGE OF CAPTAIN JOHN SARIS TO JAPAN, 1613* という書名で出版している。242 pp.
- (4) アメリカの改革派教会宣教師として1859年に来日, 1867年に帰国して1869年に再来, 1879年の帰国まで滞在。
- (5) アメリカの長老派教会宣教師, 1859年に来日, 1892年に帰国。
- (6) 金田一春彦教授監修「明解日本語アクセント辞典」, 三省堂発行, 昭和41年第9版, 926+68 pp.
- (7) Jorden の *BEGINNING JAPANESE* では, n の上に横線を引いて syllabic nasal を表わしている。
- (8) 注の(6)と同じ辞典に図解されている。
- (9) 日本放送協会編「日本語発音アクセント辞典」の巻末解説にある金田一春彦教授の説明による。
- (10)・(11)は 注(9)と同じ。